

魔法科高校の劣等生 end of deterrence

嘆きのラジオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

GODDEATER×魔法科高校の劣等生

設定、①GOD EATERだけどFate設定も少々

主人公は人理を賭けた戦いに破れたが、その戦の報奨として嫌々別世界に飛ばされたがそこは魔法の世界だった

純白の怪物は地球の極限の単独種TYPE EARTHというこ
とにした

②「TYPE EARTH」との融合によりヒロは能力を継承、ただし人間verでは能力使用は一部を除いて出来ない

③「TYPE EARTH」はヒロとの融合で冬眠状態
人格もしつかりある

TYPE EARTH

← 天空皇帝イリアスⅡアルマーク

竜神皇帝イリアスⅡドラゴーツ

オリキヤラ

神威ヒロ

神威鈴

會螺守（えにしまもる）

TYPE EARTH 設定注意

月の緑化により、オリジナルの死亡（TYPE MOON）により

その端末である地球のTYPE EARTHは死亡

亡骸を元に、新たな器を探すために赤い雨を降らした

その結果生まれたのが特異点

本来は特異点を捕縛し、亡骸を特異点と融合させ新たな星の最強種を誕生させよう

type EARTH そして月という協力者を失って地球は考えた

自ら作りあげる必要がある、だが新しく作るのではそれが生体、その性能を発揮出来るまでの時間に星が滅びては意味がないため

不完全ながらも完成された個体に地球から赤い雨という、介入することにより人造的に完全な器を創造しようとした(完成したのが特異点)

器はあくまで器、星の代行者にはなり得ない、そのため中身を入れる必要があるその中身がTYPE EARTHである

TYPEはEARTHは永久に目覚めることのない仮死状態であり、内包する星のエネルギーと星との供給(パス)は失われてはいない

故に死骸を霊子にまで分解、魂に融合させることにより必要な成長工程を省略し、実用可能な代行者を生み出そうとした

だがそれは主人公達の手により白紙に戻った

人間に倒されるような器ではいずれ同じことが起きるのではないかと危惧する

新たな器として地球は過去において最強の幻想種、大陸の支配者の情報を元に器を作成した

その結果作り出されたのが仙黏塚城の主にして世界から独立した存在として顕現できる空想世界具現「天空要塞・仙黏塚城エア」その使用者にして幻想種「白亜の銀狼」への変身能力を持つ

人類史上最も栄え、最強と謳われた

「天空皇帝イリアスリアルマーク」と古代最強にして旧星の支配者にして過去に幼体TYPE EARTHと戦闘を行い勝利した始原の白竜をベースにすることにした

目次

序章	1
純白の怪物	4
転生	7
入学式	9
魔法	12
最悪の初日	16
部活動	19
風紀委員	26
今日から風紀委員	29
バックレ	32
幕話 襲来	36
幕話 天空要塞「仙黏塚城エア」	39
R B	43

序章

荒野の中、一人の青年が倒れていた

周囲には魑魅魍魎の怪物の死体が転がっており、それらの積み重ねられた死体の上に青年はいた。彼がもつ神器と呼ばれる武器は刀身が折れており、返り血であろうものがベツタリと付いていた。

「あー死ぬかな」

薄れゆく意識の中、青年は自分の死が近いことを感じとる。

視界は既に暗く、手や足の感覚も既がない、風の音も聞こえずまるで水の中に潜っているような、そんな感じだ。

後悔はある、もつと自分が強ければこんな結末にはならなかった、

「それでも、精一杯頑張ったよな」

殺して殺して殺し尽くした、

特尉に任命され、ただ一人きりで禁忌指定の怪物を狩りつづけた命ぜられるがままに・・・

その結果が、人生の終わりがこの荒野だ

自分以外に生きるものはなく

誰にも看取られることなく、独りで死んでいく

そんなバッドエンドの三流物語

他人を助けるために無我夢中で、傲慢にも走り続けた男の終着点

沢山の人を助け、その代償に全てを失った

地鳴りが響く

この戦いの元凶にして、全てを奪った怪物が現れる

その姿は醜悪な怪物と比べて意気を飲むほどに美しい

純白の神

「まだ死ねない・・・」

限界の身体に鞭を打ち、失った片足をもう片方の足を使い神器を杖の代わりにし無理やり立ち上がる

もう何も感じないがそれが眼前にいることは理解した

「お前だけは・・・必ず殺す」

全ての元凶に対し、言葉をはく

それには恨みも怒りもない

両腕に嵌められた腕輪を外す、自身に埋め込まれた神の細胞が自分を喰らい始める

内側から喰われる痛みが身体を襲う

「レイジバースト」

神の細胞を暴走させそのエネルギーを制御し神の力を肉体へと強化する

といつても数秒が限界だが

それ以上は肉体が崩壊し、喰われ続ける

そんなことはどうでもいい

こいつさえ、殺せば

拘束フレームを全て解除し制御できる許容を遥かに越える

周囲の空間を侵食、解析

その現象に必要な条件を満たす

肉体は既に変質していた、喰らいつくされ、禍々しい怪物になっていた

本来ならば人としての意志も失われ完全な獣になっていたが、青年の執念が、それを許さない

彼を中心に膨大なエネルギーが放出される、それは怪物を飲み込み、大地を空を、星を侵食し続ける

侵食したものは解析分析され自身へ貯蓄

膨大な星の情報は小さな自分へと取り込まれる

人間には許容範囲外の情報量に身体が破裂しそうになる

だが、青年はやめない

いつ死んでもおかしくないその身体で

身体の崩壊が始まる、足から菓子のように崩れ始める

「必要最低限の条件達成」

青年の口から、コンピューターのような口調で、

崩れゆく右腕で空を、空間を喰らい、

その現象、終末の装置を起動させる

「終末捕食」

その声とともに大地が盛り上がる、それは激流のことく青年と怪物
ごと大地を丸ごと飲み込んだ

それは瞬く間にに広がり大陸を、海を、星を、飲み込んだ

失われゆく意識のなか青年は感じとる

全てを喰らい尽くし、それらを糧にし星が再生していくのを

「ああ・・・」

その眩きとともに意識は闇へと堕ちた

純白の怪物

「・・・」

身体が、肉体がなくなる

視覚、嗅覚、聴覚がなくなる

何も聞こえない

何もみえない

何も、何も

感じない

深海にいるような真つ暗な闇

しかし、何故か意識だけがらはつきりしている
ない、頭で鮮明に

(もう疲れた・・・休んでいいんだよな・・・)

《やり直したいですか?》

誰かの声が聞こえる

聞こえるはずのない、こんな何もなければしよ

ない瞼を開き、ない首で周囲を見渡す

なにもない、辺り一体暗闇

気のせいだろうか・・・?

《やり直したいですか?》

同じ声、同じ問いが聞こえる

いや、直接脳内に語りかけているような

そんな感じだ

後悔はある、だが疲れてしまった

それにあの結末は変えられない、

それがわかるからこそ僕は首をふった

(もういい)と

《そうですか、確かにあらゆる分岐点、それら全てが最終的にはあの結末になつていたでしょう》

そうだ、その通り、

あれは運命のようなもの、世界が決めた定めだ

先延ばしには出来ても結果は同じだ

《それならまた、新しく始めますか？》

？何をいつてるんだ？

新しく始める？

もう終わったんだ何を始めるんだ

《こことは違う世界、そこに貴方を飛ばしましょう》

《それが貴方への褒美です》

違う世界？褒美？何を言ってるんだ？

そもそもお前は誰なんだ？

この問答のなか意識がだんだんと覚醒していく

視覚に色がつき

なくなった腕に感覚が戻る

そこは闇ではなかった、それは白、見渡す限り真っ白な空間

声は響く

《では行きましょう・・・》

不意に何ものかに腕を引っ張られる

その、力は弱い、だが金縛りにあったかのように動けない

何がなんなのかわからない、

突然目の前に黒い空間が現れる

それに光は届かない、

無限の暗闇が続いていた

《こちらです、一緒に行きましょう》

あそこに？冗談じゃない

抵抗しようにも身体が動かない

なんなんだ？

ゆっくりと、確実に黒い空間に近づいていく

残り10 m

残り5 m

残り1 m へと・・・

空間の目の前に差しかかり

何かが喋る

《そういえば私が何者か？でしたね》

捕まれた腕から徐々にその全体の全体が浮かびあがる

それは白い着物を着た若い女だった

女は微笑みながら続ける

《私は??》

何を言ってるのかわからない

知らない言語、聞き取れない言葉

だが、何故かわかる理解できるはずがないのに

わかってしまう

「お前は・・・」

動かなかった身体が動く、その正体は

空間に入り、腕のみとなった女は純白の怪物だ

「貴方が感じた通りですよ」

手を振りほどこうと、力を込める

だがその細腕からは信じられないような力で

黒い空間に引きずりこまれた

転生

目が覚めた

見知らぬ天井

欠損した腕と脚がある

フカフカの洗剤の香りがするベットで青年は横になっていた

(ベットで寝るなんていつぶりだろうか?)

窓から暖かな太陽の光が射し込むなか青年は驚きよりも感動で涙ぐんでいた

こんなにも穏やかな朝を迎えたのは何年ぶりだろうか

思えばあの頃は常に気を張っていて真面に休まるなどということ
はなかった

死が常に隣にあり、おちおち休んでなどいられない

なんでもない普通の生活に青年は憧れていた

「もう少し寝よ・・・」

ここがどこかはわからないがもう少しだけ、この心地好さに甘えてもバチは当たらないだろう

そんな青年の願いはドアを蹴破る音ともに終わりを迎えるのだ
た

「いつまで寝てるの兄さん!!!」

「早くしないと入学式が・・・泣いてるの?」

乱暴に入ってきた見たことのない制服を着た金髪の少女

は僕をみて驚いていた

僕は少女をみて呆然としていた、それはそうだろう、彼女は戦争で死んだ僕の妹なのだから

目の前に死んだ妹がいた、それだけで動きだすには十分な理由だ
た

「ちよっ、兄さん!?!」

思わず妹に抱きしめていた

確かに妹だった、今でも鮮明に思いだす

家族の記憶、そして彼女の死を

最初こそ驚いていた妹だったが、僕の様子をみて本気だということ
がわかり心配したような顔をする

「ねえ・・・どうしたの？」

「なんでもない・・・なんでもないんだ」

涙を拭きながら青年は答える

わかっている、彼女は死んだ妹ではない

本当のことを言っても信じては貰えないだろう

だがそれでも、例え他人の空似だったとしても

生きていてくれて嬉しかったのだ

く妹に慰められる形で何があるのか聞いた

正直かなり驚いた

平和な街並み、外敵に怯えずに過ごす人々、美味しいご飯、

自分にとつての当たり前がこの世界にはなかった

その中でも魔法という存在には驚いたものだ

「てっ・・・そんなことより入学式に遅れるってば!!」

妹が机をおもつきり叩く

椅子に座り、関心深く頷く僕に焦ったように妹は言う

時計をみれば7時50分、式は確か、8時だったな

「さっさと着替えろー!!!」

僕は叩き出されるように部屋に戻り着替える

なんだか新鮮な感じに思わずクスリと笑ってしまった

クローゼットを開けたら何とも立派な制服が入っていた

(学校か・・・)

適正を見いだされてから戦闘訓練や戦争という慌ただし毎日を

送っていたため学校など行ったことがなかった

初めての学園生活、期待に胸を膨らませながら

妹に急かされ国立魔法大学付属第一高校に走るのだった

入学式

「間に合ったあ〜」

息を切らし大量の汗をかきながら指定された席に青年は座る

自分は二科生で妹は一科生らしく途中で別れることになったが

自分と同じように息を切らして手を膝についている女性が目についた、きつと妹だろう

走ったせい髪が少し乱れているがしようがない

妹も間に合ったことに安堵しなが呼吸を整える

「あの・・・大丈夫ですか？」

「初日が遅刻とは君なかなかの挑戦者（チャレンジャー）だねー」

不意に声をかけられる、隣には活発で元気そうな赤髪の女性といかにも大人しそうな眼鏡をかけた女性だ

そして、二人は気づいていないのか、並々ならぬ雰囲気をもとった黒髪の男性がいた

「あは、あはは、」

二人の言葉に笑って誤魔化す

とても朝の出来事を話すことなど出来ないからだ

「私は柴田美月と言います」

「私は千葉エリカ」

二人の女性は名乗る、これから学友となるのだ名前を覚えるのは苦手だが出来るだけ早く覚えよう、

「僕は神威ヒロです、よろしくお願いします」

「俺は司波達也だ、達也でいい」

「なら僕もヒロで大丈夫です」

（司波達也か・・・）

それはヒロがよく知る、戦場に身を置いたもの特有の気配とでもいうのか・・・

やはり平和な世界でもこのような輩はいるのか

ある種の安堵と、男に対しての警戒が高まる

（警戒しておく必要があるな・・・）

「それではこれより国立魔法大学入学式を執り行います」
進行役の声のもと入学式が始まる、

「新入生総代、司葉深雪」

(あれが一科生の主席か・・・)

一人の女性があがる

長い黒髪に清廉さを感じさせる容姿

絹のような白い肌は高貴さを思わせるほどに美しい

彼女を見つめる生徒たちが見惚れるような声をあげる

(達也と同じ感じがする)

ヒロは、ちがった

達也ほどではないが、彼女もまたただの学生ではないそんな直感にも似たものを感じた

「なんか達也に似てるね」

「そうか？」

「ああ、なんていうんだらうね雰囲気とか」

「私もそう思います、」

つい口に出してしまった

僕の言葉に賛同するような柴田さんが頷いた

「はい、お二人のオーラがピンとした面差しがよく似ているので」

オーラ？

僕の認識ではだがオーラとはわかりやすく言えば闘気、その人間を現す陽炎のようなもの

当然、普通は目視など出来ない

それがみえるということは

この世界にもあるのか？魔眼が・・・

「魔眼」

オラクル細胞を取り込んだ人間同士の子供が稀に特異な力を持った瞳を持つて産まれることがある

その瞳には世界の法則を超越した能力が宿ることもあり、元の世界でも実験という形で行われていた

(その成功例が僕とレイなんだけどね)

殆んどが失敗に終わったが、数少なくともはあるが自分を含め30人が魔眼を、もって作りだされた

能力には様々なものがある、発火、念動力といったサイキック系、予知や過去詠みといった観測系などといったもの、

だが強力であればあるほどその代償は大きかった

最高傑作と言われた魔眼、「全知全能」を持った子供はたった一度の力の解放でオラクル細胞が暴走し死んでしまった

(いや、荒神が存在しない以上はありえないか)

それなら生まれつきのものか？

様々な憶測が頭を巡り考えこむ

思わず柴田さんをマジマジと見てしまう(主に瞳を)

「あ、あの、」

「す、すいません!」

柴田さんがうつむきながら、恥ずかしそうに言う

その言葉に我に帰った僕は柴田さんに謝った

かなり気まずい

始業式が終わる

「ねえねえ、司葉君、神威君、よかったら一緒にHRに行かない?」

「悪いですが、妹を待たせているので」

「司波深雪さんですね」

「お兄様お待たせ致しました!」

透き通る程に綺麗声が廊下に響いた

魔法

深雪さんが怖かったので足早に教室に戻ったヒロ

初めての授業、教師に教わり学校という形で勉強に励み生徒たちと競いあう

ヒロにとっては全てが新鮮であり楽しかった

問題なのは魔法というのがあまりにも科学的だったことだ

もうちよつとファンタジー的なものを期待していた分、ちよつとシヨックだった

初めて学ぶ常識・・・ヒロの頭には疑問符で埋め尽くされ理解にはまだ時間がかかりそうだった

「魔法について理解することが今後の課題だなあ」

放課後になりヒロは図書館で魔法について調べていた

机には本が積み重なっていた

初日ということもあり図書館は空だったため集中できたのだから・・・
チャイムがなり下校時間になる

時間は待つてはくれないようだった

本を急いで片付け、早々に図書館を後にする

正門まであと少しという所で何やらイキリたつたような声が聞こえた

「深雪さんは僕達といえるべきなんだ！」

(ん？なんだ？)

近くのもの陰に隠れながら様子を伺う

そこには入学式にあった司葉兄弟、千葉さん、柴田さんと一科生の生徒たちが何やらいい争っていた

一触即発しそうな雰囲気だ、何を言っているのか、ここからではよく聞こえないが

どうみても交遊というわけではないだろう

不意に茶髪の日つきの悪い男が銃型のCADを抜き、術式を展開した

(まじか!?)

話では自衛手段以外での魔法の行使は違法だった筈だがタイのよい男が止めようと突っ込む
だが遅いだろう、既に術式の展開は始まっている
あのままではもろに一撃を貰ってしまう
体内を巡るオラクルを瞳へと集中させる
僕は瞳の力を解放、するよりも早く銃が空にまったバキツ！という音と共に銃型のCADが空を舞った
弾き飛ばした張本人であろう千葉さんは
警棒のようなものを森崎に向ける

(いい動きだな)

思わず感心してしまうほどの鮮やかで流れるような身のこなし、一科生の実力がどれほどかはわからないが、少なくとも接近戦においてあの場で彼女に勝てるものなどいないだろう

一部を除いて、、ではあるが

周りほそれに激昂したように魔法を起動する

「舐めるなよ」

「二科生の分際で」

「ツ！」

各々が手持ちのCADを取りだし術式を展開しようとする

だがそれが行われることはない

「ニツ!!?」

五人の動きがとまる

展開された術式は、フリーズした機械のように停止

5人も同様に金縛りにあったかのように動かない

瞳の能力は空間の固定、それは物体のみならず、アストラル体などの実体のないものにも作用する

当然、デメリットは存在する

対象を増やせば、その分だけ一人に対する時間は短くなる、「空間の固定」という情報処理で脳には大きな負担がかかるため連続で行使用することは出来ない

その上、瞳自体にもダメージはある(転生前に何度も使用したため

慣れたものではあるが)

短い間であれば疲労や目眩、充血で済むのだが
長く固定しようとするれば出血、視神経が切れ最悪の場合、視力を失ってしまう

瞳そのものが高濃度のオラクルで構築されているため、大きく欠損しない限りは再生は可能ではあるが
オラクル細胞が暴走してしまえばそれだけでは済まない
使わないに越したことはないのだ

(とはいえ、僕では術式の構築に時間がかかりすぎるからなあ)
魔法の適正がないのが恨めしい

「そこまでだ」

緊迫した雰囲気に
凜とした女性の声が響く

生徒会長、そして風紀委員長がCADを構えながらやってきた
僕はそれを確認し瞳を閉じる、

金縛りから解放されたのか一科生の生徒はたじろぐように動いた
(ふうどうやらなんとかなったようだ)

一時はどうなるかと思ったがあとはあの二人がなんとかしてくれ
るだろう

下校しようとしたらタイミングの悪いことに鉢合わせてしまっ
たトラブルが解決しヒロは息をついた

もう大丈夫だろう・・・そう考え帰ろうとした

「おっと、何を勝手に帰ろうとしてるのかな君は？」
え？

不意に声をかけられる、隠れていると油断していたため反応がおく
れる

らんぷりしてこの場を去ろうとした矢先

僕は屈強そうな男たちに囲まれた

「悪いが連行させて貰うぞ?」

何ですかー?!

そんな叫びもむなしく漢たちが僕の両腕をがっちりとホールドす

る

抵抗など出来るはずもなくヒロは大人しく連行されるのだった

最悪の初日

「ふうー」

大変だった・・・

風紀委員に連行され、魔法を使ったのではないか、何故あそこにしたのかなど、事情聴取を受けてしまった

僕が使ったのは魔法ではないため、痕跡などはないが

彼らは納得していないようだった、

「絶対目をつけられたよなあ・・・」

最悪の、1日である、別に悪いことをしていないのに警察に捕まったような気分だ

周囲は既に暗い、それなりに長く聴取をされたようだ
肩が重く感じ初日なのにも関わらずかなり疲れている
重い足どりで何とか家路についた

既に妹は帰ってきたようで灯りが窓から漏れている

ヒロはドアノブを回し、扉を開けた

その瞬間にまるで弾丸のような拳が飛んできた・・・

「ッ!!!危なッ!!!?」

なんとか顔スレスレで鉄拳を避ける

肌に触れる拳が巻き起こした風が、冗談じゃなく本気の一撃だと感じさせた

運良く避けることが出来たからいいが当たったら昏倒モノだろう

「よく避けたじゃない兄さん?」

「それで?こんな遅くまで何してたの?」

狂気の行動をとったであろう犯人、妹の顔を見る

よく避けた、じゃねーよ、思わず滑りそうになった口をつぐむ

妹が恐ろしく感じるほどの満面の笑みを浮かべていたからだ、

一見笑っているように見えるが、口元がピクピクとひきつっている、
間違いない怒っている・・・

「いや・・・これはその・・・」

言い訳を考えるが思いつかない

本当のことを言おうにも風紀委員に事情聴取されてましたなどは

そんなことを言ったら・・・殺される

あまりの恐ろしい剣幕に言葉が上手くでない

「ふっふん？話す気はないんだ？」

僕の態度が勘に触ったのだろうか、妹が拳を鳴らす

細い腕からは信じられないような物騒な音が響く

我が妹ながら怖い、前世でもそうだったが、劣らないどころかそれ以上に怖い

達也の妹と違ってこっちは分かりやすく怖い

「その・・・ちよつと調べものをしてて・・・」

「こんな時間まで？」

嘘は言っていない、実際放課後は風紀委員に捕まるまでは図書館にいたのだ

そう屁理屈を思いこむこむことで嘘をつく際におきる僅かな挙動の不審を起さないようにした

妹が今にも殴りかからんとしながら僕の顔を凝視している

あまりの緊張に冷や汗をかく

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互いに沈黙する、僕は緊張から、妹は真偽を探るように覗きこんでいるため

神にも祈る思いで真剣に妹をみる、明らかに疑っている

兄を信頼しているという気持ちを感じられない

僕ってこんなにも信用されてなかったのか？

ちよつと悲しくなってきたそんな事を考え始めたあたりで妹は口を開いた

「はあくまあいいわ」

溜め息をつき、諦めたように構えを解いた

疑ってはいるのだろうか・・・これ以上は無駄だと判断したためだろう

安堵のあまり、息をついた

「しようがないから、何があったのかは兄さんの体から聞くことにする」

「え?」

安堵したのも束の間、妹はまたもや物騒なことを言った

コキコキ!と指を慣らし

僕の腕を掴みながら、それを執行するに適するであろう場所に僕を連行しようとする

普通にこわい、わからないから体に聞くて・・・脳筋過ぎないかな?

「えつと・・・どこにでしようか?」

「もちろん道場に決まってるでしょ?」

思わず敬語口調で恐る恐る尋ねる僕に、妹は満面の笑みで答える
恐ろしいほど可愛らしい笑み、今はただただ恐怖でしかない

不味い、ボコボコにされるそう思うが腕に力が入らない

抵抗しようにも物理的な力関係は妹の方が上のようにで万力のような妹の腕を振りほどくことは出来ない

「ほら、抵抗しない・・・早くいくよ兄さん?」

そう、いうと妹は力をこめ強引に

僕を引きずりは道場へと向かうのだった

(死んだわ・・・僕)

そのときのヒロは死刑執行を待った罪人のように諦めたような顔をしていたのだった

本当に最悪の1日だ・・・

部活動

次の日の、朝顔に絆創膏を張り周囲から「何があつた？」という視線に晒されながら登校した

妹に稽古と称してボコボコにされ、技の実験台にされ

疲れた体に鞭をうち、眠い瞼をあげての学校、

正直しんどい、

授業などあまりの眠気で半分以上理解出来なかつた、休み時間も爆睡してたためクラスの皆との親交を深めることも出来ず、無味な時間を過ごすことになった

しかし放課後、ヒロの意識は覚醒することになった

早めに授業が終わり、学校の施設を回ろうと外にでた瞬間

今まで最悪な気分に陥っていたヒロは

目の前の光景にモノクロだった世界に色がついた、そんな大袈裟な表現をしたくなるほど歓喜した

生徒達が和気あいあいと新入生に対して宣伝をおこなっている

部活というのか？サッカー部やテニス部、剣道部など正門前には才気ある新入生を勧誘しようと

先輩方がある種の争いを繰り広げていた

「これが学校・・・」

呆然と立ち尽くした

なんて、素晴らしいのか

サッカー、野球、話には聞いていたが実際にしたこととはなかつた、思わず勧誘のチラシを何十枚も受け取ってしまった

手が震えている、それは任務に赴く前の緊張と似たようなものを感じた

いや、これは戦いなのだ

「どれがいいか」

じっくりと配られたチラシをみる

これからの人生を大きく決める分岐点

慎重に選ばねば、、、

チラシの内容に釘つけになっていると聞き覚えのある声が出た
声のもとをみると、そこには上級生に囲まれた千葉さんがいた
人気なことに彼女の周りを囲むように先輩方が集まっている
だが勧誘があまりにも過激だ、どうみても嫌がっている彼女のこと
などおかまいなしなのか、彼女の手や服を引っ張ったりと乱暴なこと
だ

(放つてはおけないよな)

人混みの中を掻い潜り、千葉さんの手を掴む

それと同時に瞳の力を解放する

数秒の間、周囲の動きが止まる

「ちよ、ちよつとー!」

あまり長くはない、

そのため千葉さんの静止を無視し腕を引っ張りこの場を後にし
た・・・

後ろ髪ひかれる思いではあったのだが

仕方がない、

「ぜえぜえ、ここまで来れば大丈夫かな?」

かなり走った気がする

息が切れるまで走った理由は正門以外でも勧誘が行われていたか
らだ

上級生達は僕達をみるやいなや(主に千葉さんめがけてだが)、目を
輝かせてよって来たためだ

「そうね、でもちよつと無理矢理過ぎない?」

「ごめん、困っていたようだったからつい」

息を切らしながら、からかうように僕をみる千葉さん

多少強引だと思うが、しょうがないと思う

一応謝つてはおくけど・・・

「ふーん、でも今度からは女の子にはもっと優しくするように!」
「はい」

千葉さんはニヤニヤしながら僕に指をさし注意する、

綺麗な指が僕の目線につきささる、なんか楽しそうだった

僕は全然楽しくないんだけど・・・

「まっ！でも助かったよありがとヒロ君」

「――」

千葉さんが僕に眩しい笑顔を向ける

彼女は僕の目からみてもかなり美人だ

正直かなりドキツとしてしまった

思わず顔を反らしてしまった、なんか顔が熱いし

「？そっだヒロ君、よかったらちよつと付き合っつてよ、お礼もしたいからさー」

「え、いや遠慮し・・・」

「さあいくよー」

僕の言葉を無視して腕を引つ張る、

部活・・・まだ全部みてないんだけど・・・

彼女はそんな思いなどおかまいなしなのだろうか

雲行きが怪しくなってきた、

く体育館く

何故か僕は体育館にいた

そこでは剣道部の練習が行われており、竹刀が打ち合う音が響いていた

正直あまり魅力は感じない

何度も実践を経験しているヒロにとって剣道は物足りなさを感じさせるからだ

戦場を知るものにとってはとくに

綺麗な面打ちが決まる

「つまらそっだねヒロ君」

「そっだね・・・」

千葉さんも同じなよう、あまり楽しそうには見えなかった

予定された綺麗な一本、

演舞ということもあるのだろうか

武術の真剣勝負、命の奪いあいに身を投じていた身としては退屈で

あつた

所詮はリハーサル、競技であり実戦を想定したものではないのだ退屈に感じてしまっても仕方ないだろう

「ん？」

同じような竹刀を持った集団が現れたと思えば

何やらしい争っているようだった

「女のほうは壬生清香、一昨日の全国大会2位よ、そして男のほうは桐原武内こっちは中部剣術大会チャンピオン」

全国二位と関東優勝者か、あの程度でなれるなら随分と甘い世界のようにだ

学生ならこんなものなのか？

いい争いがヒートアップしたのかこちらにまで声が響いており

両者が竹刀を構える

「面白くなってきたね」

千葉さんが先ほどとはうって変わって楽しそうに試合を見守る

何が楽しいのか・・・こういうものは大抵ろくな終わり方をしないと決まっているというのに

両者が踏み込み竹刀が交錯する

勝負は一瞬 だった、一見すると互いの腕に竹刀が当たってはいる、試合なら引き分けだろうが、実戦なら壬生先輩の勝ちである

流石全国二位ということだろうか、見事な一撃だ壬生先輩の竹刀は骨まで到達しており、実戦なら腕を切り落としていただろう

いい勝負だったこのまま終われば話ではあるが

「壬生、お前真剣勝負が望みか？なら真剣で相手をしてやる」

男がいきなりCADを取り出し、術式を展開した

竹刀は赤みを帯び、どうみても試合で使っていないものではないと直感した

(やっぱりこうなったか)

踏み込み、桐原先輩は切りつける、間一髪のところ壬生先輩は避けたようだがカスったのだろう竹刀ではあり得ない斬り傷が胴についていた

「これが真剣だ」

再度男は踏み込もうとする

竹刀を上段から振り下ろし壬生先輩に凶器と化した竹刀が迫る
だがそれが届くことはない

「何をやったのか、わかってるんですか？」

「ッ!!?」

魔法によって強化された竹刀をヒ口は素手で受け流し

壬生先輩を庇うように立ちはだかる僕に桐原先輩は驚いているよ
うだった

「うるせえ、お前には関係な・・・」

こうなれば先輩など関係ない、桐原先輩が話終わる前に側頭部に強烈な蹴りを見舞った

無防備に蹴りを受けたためが桐原先輩の体が浮かび上がり、重力に従うように地面に激突した

一撃で意識を失ったのか立ち上がる雰囲気はない

一応手加減はしたので死んではないだろうが

「先輩怪我はありませんか？」

僕は振り向きポカンと口を開ける壬生先輩に安否を問う

周りも同じようで、誰も声をあげず僕をじっとみていた

一つ遅れて周囲がざわめきだした

「あいつ二科生じゃねえか」「身の程知らずだな」驚きと侮蔑が混じったような声と視線を感じる

剣術部の取り巻きも同じようで、僕に明らかな敵意をむき出しにしてきた

「デメエ！なんのつもりだ」

魔法の使用、それも殺傷性の高い術式、彼女の身が危ないと思ったため仕方なく制圧しただけです」

「それなら剣道部の壬生だって同罪じゃねーか!!」

「聞いてましたか？魔法の使用っていいましたよね？」

「ふざけんなよ!!二科生の分際で」

二科生、二科生とうるさいな

激昂した取り巻き共は僕に罵倒をとばし殴りかかってくる
ぶっ飛ばしてやりたいが、そういう訳にもいかない

「はあ〜」

迫る拳を難なく避け、溜め息をつく

単調でどこを狙っているのか丸分かりである

避けるのは容易い、男の息が上がってきたあたりでヒロを囲むように二人の男が近づいてくる

一人では拉致があかないと判断したのか更に二人が襲いかかってくる
きた

さすがに囲まれれば避け続けるのは無理があるので振り下ろされた拳を手ノ甲で拳の勢いを殺さないように受け流し、捌く

(剣術部なんだから竹刀使えよ、竹刀を)

熱くなっているのはわかるが己の得意とする武器を使わないなど

魔法を使ってくれればなおよしだ

歯痒い思いに刈られ、周りをみる

術式を展開する取り巻きDとEがいた

(よしこれで心置きなく・・・)

魔法が使われたためやむ無く制圧しました、風紀委員に捕まっても
言い訳できる

思わず笑みが溢れてしまう、

やっと反撃できると歓喜していると急に術式が弾けとぶ

どうやら時間切れのようだ、構えを解き出入口に立った術式を弾き
とばした風紀委員をみた、

(あれ?)

どこか見覚えのある風貌に、学生とは思えない雰囲気

「達也か?」

「ヒロ・・・お前、なにやってるんだ?」

呆れるように眉をしかめCADを構える達也に僕は慌ててこの
事情を簡潔に説明した

納得してくれたようで、僕に向けていたCADを降ろしてくれた
「だがなヒロ、どうやら他にも話を聞かなければいけないものがある

ようでな、手伝ってくれるか？」

「勿論だよ達也」

というか達也はいつの間に風紀委員になったのだろうか？

疑問と共にヒロは剣術部を制圧していく

因みに正当防衛とはいえ剣術部を負傷させたとしてヒロも連行されたのだった

風紀委員

風紀指導室に呼ばれたヒロは風紀委員の上級生に囲まれながら風紀委員長から直々と指導を受けていた

「なるほど、桐原が魔法を使用し、生徒の身に危険が生じたために仕方なく反撃したのはわかる」

「だが、剣術部を全員ぶちのめしたのはやり過ぎじゃないか？いくら正当防衛といっても限度があるだろう、彼等は大会を控える身だ」

「二応、手加減したので大丈夫だと・・・」

やり過ぎたヒロは委員長に苦しい言い訳をするが

そういう問題ではないだろう？と呆れられていた

「委員長、確かにヒロはやり過ぎではありましたが、先輩方は術式を展開してしましたし、あれだけの人数を相手に無傷で捕縛というのも難しいでしょう」

「全員、気絶させてはな、それに君がいたならもっと上手くことを納められたのではないか？」

達也は説明するが風紀委員長はジロリと疑うような視線を向ける

どうやら本当に達也は何かしたようだ

信頼が厚い

「先輩は自分を過大評価しすぎです、自分は二科生です一科生の先輩方の複数人の相手などできるわけがありません・・・それに援助を依頼したのは自分です、ヒロに責任を追究するなら要請した自分にも責任を負うのが道理でしょう」

もっともらしい達也の言い分に渡辺先輩は形のよい眉をしかめた

理には叶っているのだろうか？

腕を組み数度唸るような独り言を呟いた後に諦めるように溜め息をついた

「はあく達也君、君は本当にいい性格をしているな？」

「お褒めに預かり光栄です」

（褒めてないと思う）

「だかな達也君、いくらなんでもおとがめなしという訳にはいかない、

剣術部も納得しないだろう」

「はいわかつています」

話の流れが変わった、先輩のその言葉と共に達也の能面のような表情が笑みに変わった

その光景に何やら非常に嫌な予感がした

思わずに背筋に寒気を感じる程に

「それでだヒロ君、君には罰として風紀委員として働いて貰うことにする、何か異論はあるかな？」

「待って下さい！僕は二科生ですよ！風紀委員は普通は一科生の実力のある生徒が行うべきなのでは」

何が「それでだ」、なのだろうか？

僕は反射的に立ち上がり先輩に抗議していた

想定内なのか？それとも似たようなことがあったのか？

先輩は驚くこともなく冷静に説明し始めた

「それについては問題ない、何しろ達也君をみればわかると思うが、うちは実力主義でな、二科生、一科生というのはあまり関係ないんだ」
達也を、周囲の上級生の風紀委員を見渡し、「そうだろうか？」という視線を向ける

上級生はそれに賛同するかのように頷くもの、笑みを浮かべるものが殆んどであり反対の意を示すものはいなかった

いくらなんでも脳筋過ぎないだろうか？

それでも目の前にいる姉御的な女性の尻に敷かれているのか？

「反対意見のあるものはいるか？」

「反たッ!!」

「諦めろヒロ」

反対しようと挙手しようとするが、達也に止められた

もう決定事項とでも言わんばかりにその声には憐れみが含まれていたような気がした

いや、勝手に決められても困るんですけど?!

動揺するヒロを余所に僕を品定めするような目でみていた先輩方が何やら話し混んでいる

「期待の新生」「今期は」などと歓迎するような言葉が聞こえる……
僕は風紀委員に所属するとは言っていない

「だそうだヒロ君？今回の騒動で君の実力は保証された。風紀委員は君を歓迎するぞ？」

「あの僕は部活に……」

「言っておくが今回の騒動、君にも多少の非はある、それを風紀委員に所属することではなくそうと言うのだ？安いものだろう？」

それでもなお現状が認められないヒロは反論しようとするが、それを遮るようにニヤニヤしながら渡辺先輩は言った

それは脅しでは？というかなんかヤクザみたいなこと言い出したのだがこの風紀委員長は？

だがそう言われてはぐうの音も出ない、

「それでは手続きを始めるとしよう」

ヒロをみて諦めたと悟ったのだろうか

渡辺先輩は予め用意していたと言わんばかりに
懐から書類をヒロの目の前に置いたのだった

部活……部活動……

夢にまでみたものが遠く……視界が暗くなっていくのを感じた
その様子に達也はやれやれと首を竦めるのだった

今日から風紀委員

なりゆきで風紀委員役員に任命され、気分は最早任務に赴くような緊張感とやるせなさに板挟みをされたような気分で1日をヒロは過ごすことになった

「はぁー」

いつも何もかわらない登校のはずだった

昨日と変わらなく、普通に学園の門を潜る

周囲の目線が集まる、二科生のみならず一科生の生徒たちが道をあける

ザワザワと懐疑的な視線と嫉妬の視線がヒロを刺す

その原因である右肩にブツに重さすら錯覚してしまう

風紀委員役員であるという証である腕章に視線が集まる

(うぜえ、)

物珍しきで集まる野次馬も蔑み嫉妬するような目をむける優等生も不快だった

こそこそと自分には聞こえない声で話してはいるが、大抵本人に聞かれたら困る話を本人の居る場とするなど良い内容であることは殆どない

そもそもヒロ自身、風紀委員には全く興味などなかった

それどころか楽しみにしていた青春の代名詞であると聞いていた部活を没収され半ば拗ねている

「おはようヒロ、」

「おはようございますヒロさん」

背後から諸悪の根元といえる男の爽やかな声が聞こえた

振り向けばそこには風紀委員の同僚兼クラスメイトの司馬達也がいた

「おはよう、、、どうした朝から、」

ひきつったような笑みで何とか挨拶をする

ただの挨拶のはずなのだが何故か勘繰ってしまう

隣に女神のような笑顔で挨拶する深雪さんがいなければ殴るまではいかないまでも怨み言の一つは言っていただろう、

「ああ委員長が昼に生徒会室に来てほしいそうだ」

「え、？嫌だけど？」

「はい？」

「え？」

思わず、ほぼ反射的に答えてしまった

達也は予想通りだったようで顔色を変えずやっぱりか、というように肩を竦めていたが

隣に立つ深雪さんは予想外だったのか笑顔のまま、抜けた声を出し、その意外な返しに思わずヒロも疑問符を返してしまった

それでもなお女神は笑顔を崩さない

それが更に恐怖を加速させた

一瞬の静寂、時間が停まったような錯覚に陥る

周囲の視線と深雪さんの圧がしんどい

「来なかったら此方から出向くらしいぞ」

「もしかして委員長は暇なの？」

「・・・」

「今のは聞かなかったことにしておくれ、とりあえず昼に生徒会室だ、忘れるなよ？」

念を押すように言う到達也達はこの場を後にした
最後まで笑顔がだった深雪さんが怖すぎであった

周囲の生徒達も二人が去ったことで興味を失ったのか足早に校舎にはいる

チャイムがなり

停止していたヒロの時間が動きだし、教室へ急ぐ

走りながら校舎へ向かうヒロは思うのだった

(バックレよう、)と

くその後の廊下にて

「お兄様、もしかしなくてもヒロさんは、」

「ああ間違いない逃げるだろうな」

ヒロの考えなどお見通しなのかのように達也は妹の疑問に答えた
その言葉は諦めが含まれているかのように呆れたように感じられ
た

兄がこんな顔をするのは珍しいのか、妹は少し可笑しそうにクスリ
と笑った

「フフ」

「どうした？深雪？」

「いえ、なんでもありません」

「仕方ない、授業が始まる前に渡辺先輩に報告しておくか、」

バツクれ

チャイムがなり授業終了すりは、生徒達が合図されたかのように立ち上がり一斉に外へでる

閑散とした教室の中、一人ヒロはポツンと椅子に鎮座していた
考えこむように額に手を当て一点をみつめ苦い表情を浮かべる

「.....」

時間にして一分も立たない静寂の中、彼はおもむろに立ち上がる
ガタンと椅子を乱暴にひく音が静まり返った教室の中に木霊する
彼は悩んでいた

今日の昼は何を食べるべきか、、、と

学食のメニューはカレーにラーメン、そしてシークレットメニュー
元の時代ではヒロの食生活はレーションやジャンボトウモロコシ
にジャンボトウモロコシといった感じのものだった

食料など育つ地域でも無かったのも理由のひとつではあるが、戦争
中に食に意識を向ける余裕などない

故に食事などよく煮詰められてない煮込み鍋に、ジャンボトウモロ
コシにジャンボトウモロコシをのせ寿司

カチカチのパンや缶詰めなどが腹にたまればいいだろう程度の考
えだった

野菜の嗜好品のようなものだ、作るにも土地が必要であり、機械化
と荒神の影響で野菜を作ることなど困難に近い

そもそもじやがいもやニンジンなどの存在は知ってはいたがだれ
も育て方など知らなかった

当然、そのような環境の影響で必然的に食の質は落ちる

まあ連戦からの連戦で気の休む暇がなく心身ともに疲弊していた
あのときは味覚などなかったが

今なら思う飯が旨いとは素晴らしい！と

(いつもなら安定択をとる、)

普段なら、だ

だがこれでも幾度の戦場を勝ち抜いてきた実力派エリート、時には

賭けに出ざる終えない状況に陥ったこともあり命の危機に瀕したことも多々あった、ここで挑まずして何がエリートか！

食堂に飾られた本物そっくりの食品サンプルを確認する、当然そこにはシークレットメニューはない

その未知の強敵にいつそうヒロの好奇心を刺激する
釣られた魚のように食堂に入る、

「おー！ヒロじゃねえかー！」

食堂に入った瞬間、体育会計よろしく！といった爽やかではあるが食堂全体に響くような大きな声がした

音の元にはブンブンとこちらに大きく手を振る男が居た

身長は180cm程の大柄で骨太な体格、ゲルマン系で彫りの深い顔立ちをしていた

「西条レオンハルト」干渉系の硬化魔法であり、身体能力が非常に高く、ヒロ的な第一印象は頼りがいのある野性味溢れる無頼漢といった感じだった

無骨な遠慮を知らない男かと思えば意外なところで気を聞かせる紳士的な人柄なあたり個人的にはポイントが高い

「ああレオ、、、か？」

呼ばれた方に顔を向けるとそこにはリスのように飯を頬張る姿のレオと茶碗から溢れんばかりのカツ丼と半分ほど減ったカレーがあった

茶碗の大きさも規格外であり軽く10人前以上はあるだろうと思った

あまりにも意味不明な光景に疑問系で答えてしまったくらい困惑していた

明らかに一般人のキャパシティを越えてる

あまりにも非日常（笑）の光景に思わず口元を抑える

先程まで鳴っていた腹は止み、胃液が何も無い胃に渦巻く不快感がなくなっていた

明らかに食欲が減衰しているのがわかる

見ているだけで腹が一杯になるというのはこの事なのだろうか、

よく見ればレオの周りの席が空いている、というより彼を中心に円のような空白がある

明らかに避けられてる、

「ん、どしたヒロ?」

「いや、別にてか何?それ?」

「これか? シークレットメニューらしいぞ、なんと食いきつたらタダらしいぜ」

「へ、へえ、シークレットメニュー、なんだ、」

「?」

良かったあ頼まなくて

思わず胸を撫で卸す、内心レオにグツチヨブ、と親指をたてる

そんな、ヒロの心情などわからないレオは盛られた飯を掻き込む、かなりのハイペースで飯が消えていく

いくらなんでもあの量はヒロでもキツイ

「食わねえのか?」

「ああそうだった」

レオの大食いを思わず凝視していると不思議に思ったのかレオから声をかけられた

あんまりに今のレオとは一緒にいたくはないが、彼に悪気はないだろうし、

食券を渡しレオの正面に座る

まあレオには聞きたいこともあるし飯ができるまでは彼のことについて聞くことにしよう

→生徒会室

生徒会職員、風紀委員長、

「.....」

「.....」

「.....」

「遅い!!!」

「遅いですね、」

「お兄様、これは」

「ああ逃げたな」

「ほお、一年坊が随分舐めた真似をしてくれたものだな」

「ま、まあまあマリちゃん、」

生徒会室では殺伐とした空気を放っていたことをヒロは知るよしもなかった

幕話 襲来

ときは2089年、

地球は、あらゆるものを捕喰する細胞「オラクル細胞」から形成される異形の怪物「荒神（アラガミ）」によって荒廃し、彼らの「食べ残し」である人類は滅亡の危機に瀕していた。人類の対抗手段は、生物学企業「フェンリル」によって開発された生体武器「神機」とそれを操る「ゴッドイーター」だけだった。

最新の第3神器使いにして、選りすぐりの精鋭、遺伝子操作と人体実験により誕生した超越種と呼ばれた人間で構成される特殊部隊「code-B」

総勢8名で構成されており全員が魔眼を所有しており、OP細胞に高い適応力による高い身体能力、他人の神器であつても数分間は使用できるという特異性を持っていた

主に禁忌種や新種狩り、未開領域の調査等を行っている

その中でもヒロはずば抜けた実力をもっておりチーム内では副リーダーを勤めていた

今日も何時もと変わらぬ任務だった筈だった

苦しくもやつと平和に近づいていた日常は突如として終わりを迎えた

「……………!!!」

緊急事態を知らせるベルが鳴る、

室内は事態の異常性を知らせるために紫のランプが室内を照らすそれにさとされオペレーター達が状況を確認すべく右往左往している

非常事態を知らせるランプにはその状況によって色が変わっている

非常事態、基地がアラガミによって襲撃を受けた際は赤

異常事態、未知の現象の発生は緑（赤い雨など）

緊急事態、基地の壊滅が予測され、それが高い確立で行われる場合は紫（終末捕食）

「嘘、でしょ、」

「オペレーター!!状況を報告しろ!!敵はなんだ!？」

「は、はい!アラガミの反応は一つ」

「一つだと、？」

「ですがその、驚く程の巨体です、」

「周囲全てのアラガミを捕食したものと、オラクル反応、計測可能指数を遥かに越えています」

「アラガミの詳細を報告しろ!!」

「空中高度1000mより、ぜ、全長500m程の白く発光した謎のアラガミ、数値は測定不能、ですが少なくともウロボロス100万以上のものだと予測します」

「ウロボロス100万以上だと? いやそれよりも全長500mというのは機械の故障ではないのか?」

「い、いえ信じられないですが、本当です映像写します」

「なんだよ、あれ?」

「う、、そ、」

オペレーターはモニターをみて信じられない様なものでもみたのかのような、愕然とした顔を浮かべている

それはモニター画面をみた従業員、ゴッドイーター、指令部そして我々までもが同じ反応をしていた

それはそうだろう全長500mのオラクル細胞で構成されたアラガミだけでも驚きを禁じ得ない、故にこの姿をみて言葉を失うのは当然だった

白亜の透き通った純白の城壁、それよりも高くそびえ立つ城のような建造物、それを支える大地もまた白く、色素を失ったかのようなモノクロだった

『諦めなさい、愚かな生命体よ』

唐突に聞こえる声、それは声、音というよりは脳内に響く、テレパシーのようなものだったら

『名は???星より産み出された唯一の終末装置にして星を回帰するもの、これよりこの星は生まれ変わります、抵抗をするな運命を享受し

ろ、これは終わりではない人間としての種は終わりを迎えるがこれも星の意思、無駄な抵抗などしなければ痛みを感じることなく瞬きの間に終わっている』

『故に、、、』

その言葉とともに目の前が真っ白になった

共に凄まじい衝撃波が全身を包みこんだ、

何が起きた？

「ゲホ、」

血が際限なく溢れでる右足と左腕は消し飛び、内蔵が潰れていた顔をあげるそこには先程まで基地であった残骸があった

空に浮かぶ白く発光した城、それは本にもあったお伽噺話空に浮かぶ城でありその見た目は昔に存在していたとは思えないほどに近代的、いやそれ以上の近未来的な姿、オーパーツと呼ばれる物に似ていた、巨大な砲台が至る所に配置されていた

辺り一帯にら複数のクレーターが出来ており、あの砲台が馬鹿げだ威力であることは十二分に理解できた

『貴様ら人間という種の終わりを受け入れろ』

それを機にヒロの意識は途切れた

幕話 天空要塞 「仙黏塚城工ア」

「ヒロ、後はたのんだ、」

「リーダー？」

声が聞こえた、自分を呼ぶ声がそれに答えるように返事をした

リーダーとは自分のことの筈なのにその言葉は誰かに向けられたものだった

意識が覚醒する、確かに死んだ筈だった、欠損した筈の四肢は健在、破裂した内臓は正常に稼働、バイタルには異常はない、何が起きたのかは理解出来ないが、状況が状況のため考えている暇はない

突如凄まじい衝撃波と雪崩のような土砂が視界を包みこむ、だがそれをcode-Bのメンバーが誰一人受けることはなかった

まるで見えない壁が守ってくれてるかのよう、彼らを中心にして避けていく

大海で巨大な質量を持つ物体が落ちて大きな津波を作るように当然それほどの質量を持つものなどこの辺りでは一つしかないだろう

先ほどの空に浮かぶ城が大地に堕ちていた、

城の10mほどが大地に埋もれているような錯覚に陥る
城を中心として巨大なクレーターが何層にも出来ていた

この影響を受けなかった周辺の支部、防衛基地から集まった神器使いの銃撃が雨のように城に着弾した

複数の爆発音、爆風が城壁を包む、だが城壁には掠り傷一つつくことはない

code-Bリーダー、「ハインツ||ジークムンク」の持つ魔眼「全知全能」はその物の完全性を奪いさり絶命までは行かないまでもその存在のもつ異界秩序を剥奪し、こちらの世界秩序、物理法則に従うように強制した

メンバー全員(?)が無事だったのも彼の魔眼によるもの、全知全能の能力は未来改変、あり得ざる可能性を作り出し、未来への可能性

をそののみに確定させるもの

異界秩序の無効、そして「死」そのものをなかつたことにした死者蘇生

当然能力には制限があり、存在証明を代償にしてもこの結果が限界だった

着弾とともに発する爆風が嵐のようにアラガミに包みこむ、本来ならば此れだけの爆撃を受ければ方がつくだが相手は500mをゆうに超える超ビツクサイズ、本来アラガミを破壊する銃弾は、それにとつては豆鉄砲に等しい程だろう、それがわかつていても攻撃を続ける

「生き残る」生命に対する執念のみで神器使い達は自らを奮い立て引き金を引く

数万人のGOD EATER、神器兵が一心不乱に攻撃する

雨は豪雨となり、降り注ぐ

「Code—B突撃するぞーいかに巨体でも核を抜けば終わりだ」

7人の超人が巨大な城壁に接近する

あれがアラガミである以上核（コア）が存在する筈だ

他の神器使いがあれの気を引いているうちに城内部にさえ侵入出来れば勝機があるかもしれない

それにあわせて無数の砲身がこちらに向く、数万の銃撃の雨よりはこちらを危険と認識したのか、それともただ鬱陶しかったのかはわからないが何より好都合だ

部隊はその速度を緩めることなく、加速を続ける、もちろんこれは特効ではなく、策があつての行動だ

部隊全員はヒロの合図で一人を除き神器を銃身形態へと変形させる

ガコンと引き金を引き特殊な弾丸を装填し、加速を続けながら城壁に狙いを定める

「撃てー！ー！！！！」

6つの銃身から同時に紅く発光する弾丸が放たれる、弾丸減速することなく加速を続け軌跡を描きながら飛ぶ、高速を、音速を声、城門

に着弾し爆ぜる、

爆発を共に城に備え付けられた射撃態勢へ移行していた砲身が瓦解し崩壊した

白く発光した砲身は大地に、落ちることなく霧のように宙へと消える

遷延の魔眼、未来視と似た魔眼、起こり得る可能性を視認して可能性の中で一度視たものをピンで留める

留めた可能性は対象の偶発的なオラクル細胞の暴走による砲台の自爆

銃撃による爆撃とは比較にならないほど爆風が吹き荒れる

備えられた数百の砲台が爆散、瓦解すると同時に凄まじい爆発が城壁の一部を露出させた

「・・・なんて威力、してんのよ、」

仲間の誰かがそう呟いた、当たり前だろうアラガミバレットの集中爆撃を受けてもびくともしなかつた壁が砕けたのだから

あの砲台の一つ一つがこちらにとってのアマテラスやウロボロスの光天大砲や灰域種の王砲を圧倒的に越える威力を持っているという証明していた

「目標沈黙、今のうち、に」

「がぁ、ぁ」

仲間の一人、先程、アラガミに対して魔眼を使用した女性が吐血し倒れた、

右目のから頬にかけて肌が黒色に変色し黒い肌には血管のようなものが浮かび上がっており右半身の腕にまで進行していた

「抗偏食因子を射て！オラクル細胞が暴走するぞ」

仲間の声で気づいたのか、女性は苦しみながらも携帯している透き通った緑色の液体が入った注射器を首すじに当てた

ガシユン！という音と共に変異の進行が止まり彼女の容態が安定する

右目はもう使いものにはならないだろう

それどころかいつアラガミ化してもおかしくはない

(一度の解放でこれだけの負過がかかるなんて・・・)

だが彼女に構っている暇はない、敵は今、沈黙しているこのチャンスに逃すことは出来ない

「code—4は2を連れて一時離脱しろ」

「了解」

「それ以外の隊員は城壁を越えて内部に侵入する」

そう言つて敵を見上げた、白亜の城の砕かれたはずの砲身が再度此方に向いていた

再生？いやそんなものではないまるでパーツを取り替えたかのよう

中世の大砲を思わせた砲身は、ゴツドイーターが使う銃身に変化していた

閃光と共に浮遊感が襲う、

全身の骨が軋み、鼓膜が破れたのか、フィルター超しに音が聞こえている感覚がする

山勘で展開したシールドが音をたてて崩れ落ちる、

肉体は空に放り出され目を開ければ大地に刻まれたクレーターがみえた

ヒロの周囲には神器の残骸と思えるものが同じように舞っていた

R B

(吹き飛ばされた!?)

衝撃波でどこまで飛ばされたのか見上げる程に巨大だった城はフェンリル本部と同程度の高さに見える

自分が生きていることに不可解の念を抱く、周囲に飛来する残骸をみて何が起こったのか理解する

砲撃の直撃を受ける寸前に仲間が自分を庇ったのだろう

オラクル細胞を自ら暴走させることでほんのその刹那の時間に極限まで防御に全振りした

今、自分が生きているのは仲間のお陰だ

それは仲間だからという理由だけではない希望を託されたのだ

「.....」

右腕の腕輪から偏食因子が溢れ出し腕全体を包みこむ、肩へ、脚へと、まるで肉体をコーティングするかのよう

「blood rage」

黒く纏われた泥は氷のように、燃え盛る炎のように揺らめく、泥は塊、その力を収縮し、燃料のように焰を放出し過剰

制約が完遂されれば神機は制御され安定するが

履行中は神機からの感応波逆流、オラクル流量の

増加など使用者の心身に莫大な負荷がかかる。

そのためシステムの使用は一定時間に限定されており

その間に全ての誓約を履行できなかった場合は

強制終了されるようになっていく。

、条件履行の制限時間と強制終了というセーフティを外すことで

本来は限定されている条件の天井を無制限にした、

それにより身体能力は通常の比ではない、禁忌種であろうと瞬殺出来るだろう

だがそれはリミッターを外した対価であり、自らの命を犠牲にしたもの

ブレーキが壊れた暴走機関車、、燃料がなくなるか、機体が壊れる

まで走り続ける

その???とも言える代償にその命は瞬きのように長くはもたない

「rage burst」

自滅前提の特攻

自身にコーティングされたオラクル細胞が肉体に牙をたて侵食を始める

肉体に異物が入り込んだような不快感とアドレナリンとドーパミンが過剰分泌されたようないわゆるハイと呼ばれる状態になる

タイムリミットは3分、この間だけはありとあらゆる代償が先伸ばしにされる、

刃が紅く輝く

「Gluttony」

砲身から放たれた音速の弾丸を、捕食する、完全に捕食はできない、核に匹敵するほどのエネルギーを受け止めたことで全身がバラバラになるような衝撃に包まれる、受け止めようとふん張るが意思に反して大地を抉りながら後方へと押し出される、骨が碎ける音がする、あまりの衝撃に臓器が悲鳴をあげる、眼や耳から、出血し体が限界だと訴える

だがそれは出来ない

碎かれた骨はオラクル細胞と偏食因子がより堅牢に構築し、潰れた臓器は何度も再生する

今この間にも人間としての存在を保てる限界で捕食され続ける

その度に、いや、常に肉体が破裂する痛みが襲う

だが確実にこのエネルギーを喰らっている、背中より生えた紛いものの翼を地面に固定し再び大地に足突き立て体を支える、何者にも形容し難い衝撃を受け止めながら耐える

「VOMIT BUREST」

神器が捕食形態に変形し黒い獣の口にかわる

瞬間、口から高密度のオラクルの塊を発射する、その規模は先程受け止めたエネルギーは神器の捕食機構により転化、制御可能の限界まで膨張、それは先ほどのエネルギーの4倍、総量に比例し弾丸も巨大

になる

迎え撃つように城門から流星のような弾丸が放たれたる4倍の威力と行ってもこれだけの数を受ければ相殺等容易いだろう

「???の魔眼」

視認する空間を紙とし、そこに存在する物質や霊体といったあらゆる存在をピンで指し存在そのものを停止、固定する、停止されたものはありとあらゆる機能が停止するがそれは時間が停まった状態に等しく、存在の仮死状態という訳ではない

また物理的な強度などは無効には出来ないが、エネルギーのような非物質などはそれ事態が強制的に物質に置き換えられるエネルギー量Ⅱ硬度ではなく、非物質の固体化は一定の硬度のもつ物質に変換される（鉄程度）

いくら膨大とはいえ今さら物理的強度が鉄程度ならハリボテ同然、光体を飲み込むようにエネルギーは膨張を続け肥大化

城門へ着弾する、轟音ともに空気を、世界を揺らす程の爆風が包むだがチャンスは今しかない、rage burst 使用中はあらゆる反動が起動終了後に後回しにされる。

魔眼の暴走も、肉体の過剰負荷や生命維持、仮に心臓が止まっても動き続ける

爆風のなか人体の有害物質が舞う嵐の中、天変地異と呼ぶにふさわしい空間に突貫する

右目に激痛がはしり、痛みは広がり、全身の神経が焼ききれるようなものだった、魔眼の能力を最大レンジに使用したからだろう、だがそれだけだ

死ぬ痛みなど、この執念（おもい）に比べたら何てことはない

肉体能力は一秒経過とともに強化され続け、その度に肉体が骨格が無理矢理ねじ曲げられるかのような錯覚が襲う、

ショック死しないのは契約のおかげ

それを過ぎれば肉体は完全に侵蝕され自我は完全に消滅するだろう

「頼むよ」

握る神器に話しかける、感応現象によるものであり、ヒロはメン
バーの中で唯一神器と意志疎通が出来る

神器も自分と同じく限界が近い、

互いにその命が擦りきれるまで世界に抗う

魔眼の効果は切れたのか、再び砲門が向く

避ける気はない、ヒロは走り、加速を続ける、高速を超えたのか、音
速の壁を破り、凄まじい衝撃波が体から放たれたる

核の雨、三度降り注ぐ、それは大津波のように矮小な人間を飲み込
もうとする